

築以外の防火対策。「消防」の「消防組織」は、消火に携わる人の変遷。「消防」の「装備・設備」では、消火に利用した道具、消火の際の服装、消防施設の変遷として分類した。

4. 評価

表2から読み取れる事を、時期別・項目別に評価する。

4-1. 時期別

4-1-1. 中世

火災の頻度の割に防火も消防もほとんど事項がない。ある意味、発生は天の配剤という扱いはないか。陰陽道で鎮火させていたという記録もある。平安時代から、禁裡火消と呼ばれる火消は宮殿の防火にあたっていたり、宮殿や寺社の屋根を瓦葺きにしたり、酒蔵を土蔵にするなどは行われていた。だが、民家に対策が講じられるようになったのは室町時代に入ってからである。

これらの事柄は、今回、参考にした資料にいつの出来事なのかを具体的に記したものがなかったため、各時代の初頭に起こった事項として表の中に入れた。

4-1-2. 近世

江戸時代は都市計画よりも消防に重点が置かれていた。これは有効な土木・建築的な対策が存在しなかったためであると考えられる。もちろん、火除地と呼ばれる防火帯の建設などの対策は講じられていた。消防組織は、火消が次々に編成されている。武家方の火消として大名で編成される大名火消や、町方の町火消などである。また、公共性をもった消防組織として、武家地・町人地関係なく消防に携わる武家方の定火消も存在した。

また、明暦の大火の前後、生活・文化項に事項が多い。これは江戸城内部（政治中枢）まで延焼が及んだためである。この大火がきっかけとなり、幕府は、本格的に火災対策に着手した。都市計画・消防組織は勿論、火災を起こさぬよう、強風時の外出制限、風呂焚きの時間の制限など、人々の生活に対して制限をかけるような防火の町触も増加した。

4-1-3. 近代

大火は明治時代にはほぼ毎年起こっている。そして、都市計画や消防組織項でも明治時代には事項が多い。明治維新後、幕府から日本政府に政治体系が変化したことにも起因するであろう。都市の在り方にも一番変動のあった時代である。火災の発生は、土蔵造り程度の耐火構造しかない、木造建築ばかりの近世以前の方がはるかに多いはずであるが、大火で焼けてしまうなどして記録が残っていないという実情がある。また、法律が整備され、研究も進み、火災の記録を意識的にとるようになったことも関係していると考えられる。

1901年以降、大火が少なく、防火・消防ともに目立った事項は少ない。これは、上水道と消火栓の整備が東京から大火の発生を減じたからである。消防組織も大枠は固まり、消防技術もそれ以前と比べ大幅に進歩した。

4-2. 項目別

4-2-1. 大火

明治時代、表2が真っ黒になっており、大火が毎年起こっていることがわかる。だが、近代は1951年以降、大火といえる火災が少なくなる。それに対し、近世は、火災対策を講じているにもかかわらず、明治ほどではないにしろ、「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるように、大火は頻発に起こっており、250年間、頻度に変化はない。また、大火の記録は、中世・近世でも他項目に比べて多くみられる。火災により文献が燃えてしまったことも考慮すると、耐火建物などがなく、木造建築ばかりの時代であれば、今回取り上げた数よりもさらに多くの火災が発生していたと考えられる。

4-2-2. 土木・建築

近代に入って特に盛んである。近世以前とは違い、西洋文明の輸入で土木・建築技術の進歩が目覚ましかったからといえる。また、近代以降は物理的対策だけでなく、都市計画に際し、どのようにすれば延焼が防げるかという研究も進められている。このたび、それらも都市計画として扱った。

4-2-3. 生活・文化

近世に顕著にみられる。江戸時代は、町民の行動を制限した町触が多い。電気やガスのない時代は、日常的に火を直接取り扱う機会が多く、その上、建築物は燃えやすい構造であったためである。近代以降、人々の生活の中心が火ではなくなるため、人々の火の扱いを制限するより、都市計画に力が入れたものと考えられる。

4-2-4. 消防組織

近世・1850年～1900年に多い。近世の消防組織項の事項の多さは火消の存在に起因する。「4-1-2. 近世」で前述した通り、火消が細分化されていることが一つである。1850年～1900年は動乱期であり、明治新政府が消防改革に着手し、火消から消防組・消防団に変わるためである。

4-2-5. 消防装備・設備

消防体制がいくら変化しても、消火方法が大きく変化することはない。江戸時代の火消も基本装備は決まっていた。大きな変化を生むのはやはり時代の境である。近代化を遂げた明治以降の消防自動車の登場である。ちなみに、本研究では、設備や道具の細部の変化は取り扱っておらず、新たに登場したものだけを記載している。

5. まとめ

本研究では、火災安全に関する項目を以上のように分類したが、項目をより細かくすれば、さらに評価ができるように思う。中世・近世・近代では生活様式も人と火の関わり方も変化するため、各時代にしか見られない特徴があるのだが、本研究での分類方法では、その点が不明瞭であったかもしれない。特に、江戸時代の火災に関する文献は興味深いものが多く、町触等の掟を整理し、他の時代と比較することが今後の課題である。